いのちと地域を守る　毎月11日掲載　防災・減災のページ

■支援学校 被災の教訓、次への備え

通学バス対策や備蓄の充実図る

石巻支援学校（石巻）

東日本大震災では、さまざまな障害のある子どもが通う各地の支援学校も被災した。避難所には指定されていなかったものの、地域住民や病院の患者を受け入れた石巻支援学校（石巻市）は、震災の教訓を生かそうと1年かけて防災体制を見直した。津波の影響はなかった光明支援学校（仙台市）でも、次への備えが始まっている。弱者を守る配慮が行き届いた支援学校の対策は、地域の防災を考える上でも示唆に富んでいる。

震災後、石巻支援学校には、81人が避難した。地域住民や児童生徒と家族ら学校業務と避難所運営に当たった。

■石巻支援学校が始めた主な取り組み

- 通学バスの避難場所を10分おきに設定
- 地区ごとの安否確認担当職員の指定
- 第３避難先まで記した児童生徒名簿の作成
- 50人が３日過ごせる備蓄品の準備
- 体験を重視した防災教育の実施

考える

教室に各自 非常持ち出し袋

光明支援学校（仙台）

光明支援学校の教室には震災後、防災ずきんが入っていたロッカーに、非常持ち出しリュックが加わった。

震災を教訓に昨年度から、PTAと学校が児童生徒一人一人の家庭に物資の準備を呼び掛けている。中身は水や食べ物、医療機器など。

お気に入りのグッズを加えることも勧めている。普段と異なり、見通しが立てられないために生じる子どもの不安を取り除くというねらいだ。

中等部3年の女子生徒は、水、食べ物のほかに縫いぐるみや本を入れた。いずれも幼いころからのお気に入り。遊んだり、読んだりして、愛着がある。

昨年3月11日は、卒業式の日だった。PTAと学校は、震災後、家族と一緒だった。女子生徒は母親と一緒だった。

中身は水、食べ物、医薬品、「次は家族と離れて被災するかもしれない。そんな時、少しでも気持ちを落ち着けてほしい」と願う。

障害のある子どもに限らず、被災時、家族と離れ離れのケースは多いと想定される。「必要」リストに、家族写真を推奨する。

専門家もいる。写真は、家族を捜す際の手掛かりとしても使える。

学校は本年度、避難の初期対応を臨機応変に対応するよう訓練する。「防災ショート訓練」を導入した。児童生徒は訓練時に、教室やプールサイドで、物が落ちてこない場所や、倒れてこない場所を探し、身を寄せ合う」と話す。

中等部の女子生徒の持ち出しリュックの中身。水、食べ物のほか、お気に入りの縫いぐるみと本が入っている＝仙台市、光明支援学校

中身　水、食べ物…縫いぐるみや家族の写真も

教室の後ろのロッカーの下段に用意された持ち出しリュック。上段は防災ずきん＝仙台市、光明支援学校

通常の避難訓練と合わせて、捜す際の手掛かりとしても使える。

学校は本年度、避難の初期対応を臨機応変に対応するよう「防災ショート訓練」を導入した。児童生徒は訓練時に、教室やプールサイドで、物が落ちてこない場所や、倒れてこない場所を探し、身を寄せ合う」と話す。

探る

東北大准教授　杉浦 元亮さん

東日本大震災の発生以来、「生きる力」とは何か、と考えている。

例えば、危機感や判断力も明らかに生きる力である。日頃から危機感を持って装備に備え、津波の情報を聞いてすぐに避難できる人は、どう考えても災害の危機を回避できる可能性が高い。その時に他の人のことを気遣っている人は逃げ遅れるかもしれない。しかし一方で、他の人への気遣いは、良好なコミュニケーションや利他的な行動を通じて社会全体でみんながよりよく「生きる力」に結びつく。

災害を乗り越えるための生きる力とは何なのか、多面的で筋縄には理解が難しい。

災害乗り越えるための「生きる力」

脳の働き方の個性 生かしたい

すぎうら・もとあき　東京都出身。東北大学院医学系研究科博士課程修了。同助手、ユーリヒ研究センター（ドイツ）研究員、宮城教育大助教授、生涯学習研究推進機構専門員を経て08年から現職。専門は脳機能イメージング。41歳

私は脳機能イメージングという技術を使って人間の心の生起する仕組みを研究しており、特に社会や他人とのつながりに関する社会的な脳の機能に興味を持っている。

脳はどうやって他者の脳が考えていることを理解するのか、脳はどうやって自分を自分と比べて理解するのか、脳はどうやって自分のことを他者に伝えるのか。そんな哲学的な問いに、脳の仕組みで答えようとしている。だから、生きる力についても大な社会的な脳の働きから考えてしまう。

他者への気遣いや利他的な行動が生きる力に結びつくのは、人間が組織・集団として社会で生きる動物だからである。

人間がもそれぞれ単独で、お互いに助け合うことなく生きる動物であったら、生きる力の強い人とは、どうなっていたのだろうか。

社会的な脳の働きは人それぞれで大きく異なる。身体を動かす、物を見るといった基本的な脳の働きに個人差はほとんどない。

それと比べて社会的な脳の働きは個人差が際だった。それぞれの個性は、プラスもマイナスもあるが、全体として長い目で見た時には、その多様性が重要だと考えている。そういった見方は、人が社会で災害を乗り越えるために重要なのではないか。

脳の働き方の個性が、ちょっとした教育で変わるとは思えない。人とは、どうしたら災害時に役立つ脳を構築していけるか。災害時に違った行動が期待されるべきだと、防災訓練も通っていい。人の個性を生かす災害対応を科学から提案できないかと考えている。

伝える

■鉄塔の上、生きる気力失せた時（名取市閖上）

家族のメール 励みに

名取市閖上4丁目の自宅にいた会社員森屋克典さん39は、家ごと大津波に流されながら、鉄塔に飛び移った。足元で濁流が渦巻く中、森屋さんを襲うショック、寒さ、疲労。生きる気力を失いかけた時、家族からメールが届いた。

森屋　克典さん

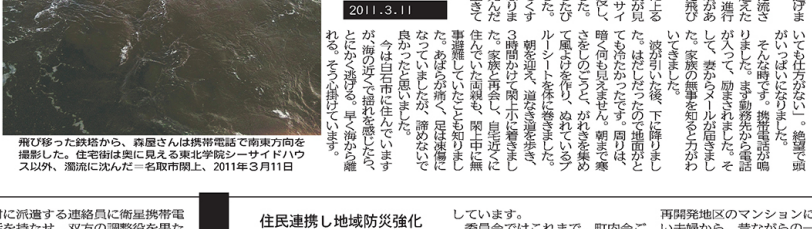
震災当日は次女の誕生日だった。

揺れが収まった後、大津波警報が出たので、妻、長男、長女、次女と、閖上小に向かいました。その後、私だけ車と荷物を取りに、自転車で家に戻りました。まだたくさんの人が、家や避難にいました。

自宅でオーブンという音を聞きました。金属がなと思ったら、南から津波が押し寄せてきました。慌てて2階に上がると、水位がみるみる上がり、隣の家が動き始め、自宅に迫りました。つかる前にベランダに足をかけ、屋根に上りました。

その後、自宅も動き出し、家族が次々に飛び移ってきました。「避難所の家族は死んだ」。慌てて2階に上がると、水位かもしれない。自分だけ生きて事避難していたことも知りました。あばらが痛く、足は負傷になっていましたが、諦めないで良かったと思いました。

今は自宅用に住んでいますが、海の近くで揺れを感じたとにかく逃げる。早く海から離れる。そう心掛けています。



飛び移った鉄塔から、森屋さんは携帯電話で南東方向を撮影した。住宅街は奥に見える東北学院シーサイドハウス以外、濁流に沈んだ＝名取市閖上、2011年3月11日

2011.3.11

石巻支援学校が震災直後を乗り切った主なポイント

現場から

県と市町村 連絡しっかり

福島県防災対策課主任主査　椎名勉さん（44）

福島県災害対策本部の防災行政無線は2回線しかなく、東日本大震災の発生直後は市町村と連絡が取れなかった上、福島第１原発事故の広域避難で県が調整役を果たせず、市町村同士の連絡で避難者を受け入れたケースが多くありました。

大きな災害では初動が災害対応の成否を決めます。今回の教訓を生かし、問題点を見直した防災計画を11月にまとめる予定です。

具体的には、災害発生時に県から市町村に派遣する連絡員に衛星携帯電話を持たせ、双方の調整役を果たします。突発的な複合災害でも対応できるプロジェクトチームを設ける体制づくりも盛り込みます。

県トラック協会など物流の専門家に災害対策本部に入ってもらい、効率的に物資を調達して保管する協定を結ぶことも考えています。

住民連携し地域防災強化

仙台市八本松市民センター職員　本名紀恵子さん（54）

仙台市太白区八本松地区の町内会長や社会福祉協議会の代表ら21人が集まる「八本松地域防災サミット委員会」の事務局長を務めています。昨年5月の発足以来、月に1度集まり、地域の課題を共有しています。

委員会ではこれまで、町内会ごとに避難誘導や安否確認などの担当者を決めるなど、災害に備えた態勢を構築してきました。地域防災訓練の在り方についても話し合いを重ねています。

八本松の住民は、再開発地区のマンションに住む若い夫婦から、昔ながらの一軒家に住む一人暮らしの高齢者までさまざまです。震災時、どこに誰が避難しているか分からず混乱しました。

災害に強いまちの基本は、住民同士の顔の見える関係。一人でも多くの住民に委員会の活動に参加してもらいたいです。